

■エサ=ペッカ・サロネン/フォーリン・ボディース

フィンランド出身のエサ=ペッカ・サロネン（1958-）は国際的な指揮者として、その名前が知られている。日本へ来る機会も多く、ちょうど今年も5月中旬に来日して、フィルハーモニア管弦楽団を指揮する予定になっている。しかし、本来は作曲家志望で、同じシベリウス音楽院出身のカイヤ・サーリアホやマグヌス・リンドベルイらと切磋琢磨した仲間である。戦後生まれのフィンランドを代表する一人と言っていい。しかし、40代になると指揮活動の忙しさから創作にほとんど時間が割けず、少し立ち止まる必要を感じたのだろう。2000年当時、ロサンゼルス・フィルの音楽監督の地位にあったが、1年間、指揮活動を休止して作曲に専念。その期間に仕上げられた曲の一つが《フォーリン・ボディース》である。

タイトルの「フォーリン・ボディース」は「異物」という意味だが、ここでは医学的、生物学的な用語としての異物だけでなく、幾つもの意味が込められているという。たとえば、ロサンゼルスに住むフィンランド人という自分の存在。20年以上の時間を母国から離れて過ごしてきたサロネンは、常に回りとは異質であり続けた。サロネンはロサンゼルスの朗らかでエネルギーに満ちた街を楽しんでいたが、彼自身が北欧人のシャイな性格のままであることは自覚していた。あるいは、ボディースは身体という意味でもあって、20年を超えるサロネンの指揮体験から、純粋な頭脳の産物ではなく、身体的なリアリティをもった音楽により興味を持つようになったことも示唆されている。

3つの楽章からなり、続けて演奏される。「ボディ・ランゲージ」と題された第1楽章は、冒頭から重厚な響きで絶え間なく機械的な動きが続くのだが、精密機械というより、どこか歪みを含んだ動きの連鎖である。あたかもロサンゼルス都市がもつエネルギーが投影されているかのようだ。弦合奏を主体とした音の塊が次々とリズムを刻んでいくが、一つのシステムから次のシステムに転換するとき、突然のようにみえて、じつはその前後に相互の要素が「異物」として侵入しあっている。後半、テンポが少し緩やかになり、アルト・フルートの独奏を伴う部分を経て、木管楽器によるコラールを弦合奏の刻みが伴奏する部分で終わる。

第2楽章「ランゲージ」は、サロネンがスウェーデンの詩人アン・イエーダールントの歌詞を用いて書いた合唱曲「ディープ・イン・ザ・チェンバー」に基づいて作曲された。チェロとコントラバスにスコルダトゥーラ（=特殊調弦）をもちいて、自然倍音を作り出しているのが特徴。チューブラ・ベルの刻みとともに、管楽器の穏やかな楽想で始まる主部に続いて、軽やかなダンスのような動きのある中間部が音量を増したのち、穏やかな主部の楽想にもどる。続く第3楽章「ダンス」は快適な速度の機械的な動きで始まるが、途中から異質な3連符が入ってきて、リズムを崩壊へと導く。2001年の初演時には第1楽章の初めと第3楽章の終わりはブルックナー風にオルガンで音響を増強していたが、今回、演奏される2004年の改訂版ではオルガンに代わって5弦エレキベースが使われている。

楽器編成：ピッコロ2（フルート持ち替え1、アルト・フルート持ち替え1）、フルート2（バス・フルート持ち替え1）、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3

（E♭クラリネット持ち替え1）、バス・クラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、マリimba、マラカス、テンブル・ブロック、ウッド・ブロック、ウインド・チャイム、ヴィブラフォン、ギロ、トムトム、銅鑼、ログ・ドラム、小ゴング、アンティークシンバル、チャイム、タイ・ゴング、バス・ドラム、グロッケンシュピール、クラベス、ハイ・ハット、シズルシンバル、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、5弦エレキベース、弦5部

※スコア上の表記

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。